『フロリヤンとフロレット』と『ギヨーム・ド・パレルヌ』

── 13 世紀の「伝記物語」と「冒険物語」──

渡　邉　浩　司

1. はじめに

「アーサー王物語」の実質的な創始者クレティアン・ド・トロワ（従来の表記ではクレチアン・ド・トロワ）[1]の作品群以降に書かれ、これまでしかるべき評価が与えられてこなかった、中世フランス語韻文の作品群がある。それは 17 編の作品と数編の断片作品であり、リシャール・トラクスラーが 1997 年に刊行した分析的書誌[2]で挙げている。

17 編の作品は順に、『危険な墓地』、ロベール・ド・ブロワ作『ボー

1）　本稿でのクレティアン・ド・トロワの物語群からの引用には、ガリマール出版のプレイヤッド版『クレティアン・ド・トロワ全集』（D. Poirion, (dir.), *Chrétien de Troyes, Œuvres complètes*, Paris, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 1994）を用いる。「アーサー王物語」の草創期については、リシャール・トラクスラー（渡邉浩司・渡邉裕美子訳）「ヨーロッパにおけるアーサー王文学の誕生―ジェフリー・オヴ・モンマスからクレティアン・ド・トロワまで」（中央大学『中央評論』68 巻 3 号（通巻 297 号）、2016 年、166-173 頁）を参照。

2）　R. Trachsler, *Les Romans Arthuriens en vers après Chrétien de Troyes*, Paris-Roma, Memini, 1997. この分析的書誌で取り上げられている作品群の主な特徴については、リシャール・トラクスラー（渡邉浩司訳）「余剰な 1 本の剣―古フランス語韻文物語『双剣の騎士』をめぐって」（中央大学『仏語仏文学研究』第 49 号、2017 年、85-120 頁）中、86-89 頁を参照。

ドゥー』、ルノー・ド・ボージュー作『見知らぬ美丈夫』、『双剣の騎士』、『クラリスとラリス』、『デュルマール・ル・ガロワ』、ジラール・ダミアン作『エスカノール』、ギヨーム・ル・クレール作『フェルギュス』、『フロリヤンとフロレット』、『グリグロワ』、『アンボー』、フロワサール作『メリヤドール』、ラウール・ド・ウーダン作『メロージス・ド・ポールレゲ』、ジャン作『リゴメールの驚異』、ラウール作『ラギデルの復讐』、『イデール』、『ジョフレ』である[3)]。また断片作品は『ゴーヴァンの幼少年期』[4)]、『イラスとソルヴァス』[5)]、『ゴギュロール』[6)]、『丈のあわないマントを着た少年』、『メリヨール』である。

これらの韻文作品群は、13 世紀中頃までに成立した中世フランス語散

---

3)　このうちの複数の作品については、以下の拙稿を参照されたい。「《伝記物語》の変容―ギヨーム・ル・クレール作『フェルギュス』をめぐって」（中央大学『仏語仏文学研究』第 39 号、2007 年、25-67 頁）；「《伝記物語》の変容（その 2）―『グリグロワ』をめぐって」（中央大学『人文研紀要』第 59 号、2007 年、47-80 頁）；「《伝記物語》の変容（その 3）―ロベール・ド・ブロワ作『ボードゥー』をめぐって」（中央大学『仏語仏文学研究』第 51 号、2019 年、1-32 頁）；「動かぬ規範が動くとき― 13 世紀古仏語韻文物語『アンボー』の描くゴーヴァン像」（『剣と愛と　中世ロマニアの文学』中央大学出版部、2004 年、67-92 頁）；「3 本目の剣を祖国に残すメリヤドゥック― 13 世紀古フランス語韻文物語『双剣の騎士』を読む」（『続　英雄詩とは何か』中央大学出版部、2017 年、197-232 頁）。

4)　ジャン＝シャルル・ベルテ（渡邉浩司・渡邉裕美子訳）「『ゴーヴァンの幼少年期』―失われた物語の断片群」（第 1 部①；第 1 部②；第 1 部③）、中央大学『中央評論』73 巻 1 号（通巻第 315 号）、2021 年、148-162 頁；73 巻 2 号（通巻第 316 号）、2021 年、75-91 頁；73 巻 3 号（通巻第 317 号）、2021 年、185-199 頁。

5)　ジャン＝シャルル・ベルテ（渡邉浩司・渡邉裕美子訳）「『イラスとソルヴァス』―知られざる（韻文）円卓物語の断片」、中央大学『中央評論』72 巻 1 号（通巻第 311 号）、2020 年、96-111 頁。

6)　ジャン＝シャルル・ベルテ（渡邉浩司・渡邉裕美子訳）「『ゴギュロール』―知られざる騎士道物語の断片」、日本カムリ学会（日本ウェールズ学会）『日本カムリ研究』15 巻、2021 年、1-11 頁。

文による「聖杯物語群」[7]の陰に隠れ、クレティアン・ド・トロワの「エピゴーネン」、つまり独創性のない模倣者（追随者、亜流）の作品群として、否定的に評価されてきた。しかしクレティアンの物語群や「聖杯物語群」との綿密な比較を進めれば、各作品の作者がクレティアン以降に出揃った「アーサー王物語」の筋書き・テーマ・モチーフを独自に改変して利用したことが分かるだろう。こうした作業には比較神話学的なアプローチ[8]が極めて有効であり、これらの作品群の再評価につながるはずである。

先にタイトルを列挙した 17 編の作品と数編の断片作品は、『メリヤドール』（1365 ～ 1380 年）を別にすれば、すべて 12 世紀後半から 13 世紀後半にかけて書かれた韻文作品である（このグループに属する各作品の創作年代を確定することは難しい）。これらの作品群を筋書きから分類するために、ガストン・パリスの提起した「挿話物語」と「伝記物語」が使われてきた。騎士の鑑ゴーヴァン（英語名ガウェイン）を主役とした『危険な墓地』、『アンボー』、『リゴメールの驚異』、『ラギデルの復讐』は、「1 人の有名な主人公の挿話の 1 つを語るが、しばしば互いに錯綜する多くの冒険からなっていることが多い」[9]「挿話物語」に含まれる。

これに対し「伝記物語」は、「1 人の主人公の誕生から、あるいは少なくともアーサー王宮廷への出現から物語を始め、その宮廷で物語の主題となるべき冒険が主人公に課され、主人公の武勇を多少とも長々と語り、最後には主人公の結婚に至るもの」[10]であり、トラクスラーの挙げた作品群

7） 拙稿「13 世紀における古フランス語散文「聖杯物語群」の成立」、中央大学『人文研紀要』第 73 号、2012 年、35-59 頁。

8） こうしたアプローチのために必携の書は、フィリップ・ヴァルテール（渡邉浩司・渡邉裕美子訳）『アーサー王神話大事典』（原書房、2018 年）である。

9） G. Paris, « Romans en vers du cycle de la Table ronde », *Histoire littéraire de la France*, t. 30, 1888, p. 1-270（ici, p. 15）.

10） *Ibid.*, p. 14.

のうち『ボードゥー』、『見知らぬ美丈夫』、『双剣の騎士』、『クラリスとラリス』、『デュルマール・ル・ガロワ』、『エスカノール』、『フェルギュス』、『フロリヤンとフロレット』、『グリグロワ』、『メロージス・ド・ポールレゲ』、『イデール』、『ジョフレ』が該当する。本稿では、これらの中でも、作者不詳の『フロリヤンとフロレット』[11)]（以下では『フロリヤン』と略記）に焦点を当てる。

13 世紀後半に成立したと推測される『フロリヤン』には韻文や散文によるアーサー王物語群からの顕著な影響が認められるため、別稿[12)]で対象をクレティアン・ド・トロワの作品群と、「聖杯物語群」の中核を占める『ランスロ本伝』（1215 ～ 1225 年）の冒頭に限定して比較を試みた。しかし『フロリヤン』には、「アーサー王物語」だけでなく、「武勲詩」「古代物語」「冒険物語」など複数のジャンルにまたがる作品群との共通点も数多く認められる。

「冒険物語」は、「その舞台がブルターニュではなく、しかも登場人物たちが他の物語に再び現れてこない物語」を指す。「神秘感よりも写実主義の傾向を示している」[13)]ことから「写実的」物語[14)]と呼ばれることもあり、今日 100 編ほど知られている。このジャンルの代表的な作者はジャン・ルナールであり、『影の短詩』[15)]、『ギヨーム・ド・ドール』[16)]、『鳶（とんび）』

11） 本稿で用いる『フロリヤン』の底本は、アニー・コンブとリシャール・トラクスラーによる校訂本である（*Floriant et Florete*, édition bilingue établie, traduite, présentée et annotée par A. Combes et R. Trachsler, Paris, Honoré Champion, 2003）。

12） 拙稿「《伝記物語》の変容（その 4）―『フロリヤンとフロレット』をめぐって」、中央大学『人文研紀要』第 99 号、2021 年、399-432 頁。

13） V. = L. ソーニエ（神沢栄三・高田勇訳）『中世フランス文学』白水社、1990 年、68 頁。

14） 横山安由美「中世の宝石箱―「写実的」物語」（原野昇編『フランス中世文学を学ぶ人のために』世界思想社、2007 年、88-98 頁）を参照。

15） 邦訳は、佐藤輝夫訳『水影の歌―フランス中世恋物語集』（カルチャー出版、

を著した。本稿では、「冒険物語」に属する『ギヨーム・ド・パレルヌ』[17]（以下では『ギヨーム』と略記）との比較から、『フロリヤン』の作者が着想源とした文学伝承に迫りたい。

2.『ギヨーム・ド・パレルヌ』をめぐる基本的な情報

『フロリヤン』についての基本的な情報（写本、推定創作年代、作者と時代背景など）は、『フロリヤン』における妖精モルガーヌを扱った別稿[18]ですでに整理して紹介した。ここではまず、『ギヨーム』を伝える写本と校訂本、推定創作年代と時代背景などを整理しておきたい。

『ギヨーム』を伝える唯一の写本は、フランス・パリのアルスナル図書館が所蔵する 6565 番写本である。これは 185mm × 17mm の 158 葉からなる 13 世紀第 3 四半世紀の写本で、犢皮紙（子牛の皮をなめして作っ

1975 年）所収『水影の歌』。

16） ジャン・ルナールがこの作品に与えた題名は『薔薇物語』であるが、ギヨーム・ド・ロリスとジャン・ド・マンによる同名の作品との混同を避けるために、慣例では『ギヨーム・ド・ドール』と呼ばれている。邦訳は、ジャン・ルナール（松原秀一訳）『ばらの物語』、松原秀一・天沢退二郎・原野昇編訳『フランス中世文学名作選』白水社、2013 年、297-397 頁。

17） パレルヌ（Palerne）は、イタリアのシチリア島北西部に位置する町パレルモの中世フランス語名である。最初期の用例は、「武勲詩」の代表作『ロランの歌』の第 209 節に見つかる。甥ロランの戦死を知ったシャルルマーニュが、反旗を翻す可能性のある敵軍を列挙する件で、「サクソン人を始めとし、ハンガリー人、ブルガリア人、服わぬ数多の輩、ローマ人、アプーリア人、パレルモ、アフリカ、カリフェルヌの者ども」（神沢栄三訳『ロランの歌』、『フランス中世文学集 1』白水社、1990 年、111 頁）に触れている。このうちパレルモに相当する原語がパレルヌ（Palerne）である。この形は、ガストン・パリスが推測するように、サレルノのフランス語名サレルヌ Salerne との類推から生まれたのかもしれない（G. Paris, « La Sicile dans la littérature française du Moyen Age », *Romania*, 5, 1876, p. 108-113, ici, p. 108）。

18） 拙稿「『フロリヤンとフロレット』における妖精モルガーヌ」、中央大学『仏語仏文学研究』第 53 号、2021 年、33-64 頁。

た紙）の各葉の表裏がそれぞれ2つの欄に仕切られ、各欄に30行（まれに31行）の詩行が記されている。写本の第1葉から第76葉までを占めるのがジャン・ルナール作『鳶』（1200～1202年頃）であり、『ギヨーム』は第77葉から第157葉を占めている。

『ギヨーム』の最初の校訂本は、アンリ・ミシュランによって1876年に刊行されている[19)]。しかしこの校訂本には注や語句索引がなく、しかも数多くの誤読があったため、アレクサンドル・ミシャは1990年に新たな校訂本を発表した[20)]。本稿では、このミシャ版を底本として用いる。

作品の成立年代を推定するための鍵は、物語の最後で言及されている被献呈者の名「伯爵夫人ヨランド」（comtesse Yolande）である。アレクサンドル・ミシャは、このヨランドがエノー伯ボードゥアン4世の娘を指していると考えた。1131年頃に生まれた彼女は、まずイーヴ・ド・ネール（Yves de Nele）と結婚し、イーヴの死後にサン＝ポール伯（comte de Saint-Paul）[21)]と再婚、1223年にはまだ存命だったという[22)]。以上の点を

19） *Guillaume de Palerne*, publié d'après le manuscrit de la Bibliothèque de l'Arsenal à Paris par H. Michelant, Paris, Firmin-Didot（Société des anciens textes français）, 1876.

20） *Guillaume de Palerne, roman du XIIIe siècle*, édition avec introduction, notes et glossaire par A. Micha, Genève, Droz, 1990.

21） 第3回十字軍に関する文献で、イングランド王リチャード1世（獅子心王）とフランス王フィリップ2世（オーギュスト）の遠征中の情報を伝える『イティネラリウム・レギス・リカルディ』（*Itinerarium Regis Ricardi*）（13世紀初頭）には、サン＝ポール伯への言及が複数見つかる。それによると、サン＝ポール伯はフィリップ2世の随行員として1191年にパレスティナに到着したものの、その後はリチャード1世に仕えたという。アイリーン・ペティット・マッキーハンは、『ギヨーム』の作者がシチリアを舞台にした根拠として、1190年から1191年にかけての秋と冬にサン＝ポール伯がフランスとイギリスの十字軍兵士とともにシチリアに滞在したことを挙げている。この時期にサン＝ポール伯がシチリアで目撃したことが、「伯爵夫人ヨランド」を楽しませるための物語の素材になったのかもしれない（I. P. McKeehan, "*Guillaume de Palerne* : A Medieval *Best Seller*", *PMLA*, Vol. 41, No. 4, 1926, pp. 785-809,

根拠にして、ミシャは作品の成立を 1220 年代頃までと推測した[23)]。

これに対し、12 世紀から 13 世紀の史実を詳しく検討したクリスティーヌ・フェルランパン＝アシェによると[24)]、被献呈者ヨランドはむしろブルゴーニュのヨランド（1247 年生まれ）である可能性が高いという。1265 年に結婚した最初の夫ヴァロワ伯ジャン・トリスタン・ド・フランスと死別し、ロベール・ド・ダンピエール（別名ロベール・ド・ベチューヌ、後のフランドル伯ロベール 3 世、1249 ～ 1322 年）と 1272 年に再婚して 2 男 3 女をもうけ、1280 年に亡くなった人物である。このヨランドの死については、彼女がロベールの先妻の息子シャルルを殺害し、ロベールの怒りを買って絞殺されたという恐ろしい噂があった。この噂は、『ギヨーム』に登場するスペイン王の後妻ブランドが、継子アルフォンスを人狼の姿に変える筋書きと重なっている。

『ギヨーム』に言及のあるもう 1 つ重要な固有名は、大団円でギヨームとメリヨールを祝福する教皇クレマン（‘Pape Clemens’）である。「2 人のグレゴワール（グレゴリウス）の間にいた教皇」（‘uns apostoiles, / Qui fu entre les .II. Grigoires’, v. 9355-9356）とされるこのクレマン（クレメン

---

especially, p. 803）。第 3 回十字軍（1189 ～ 1192 年）については、エリザベス・ハラム編（川成洋ほか訳）『十字軍大全』（東洋書林、2006 年）第 4 章を参照。

22） A. Fourrier, « La ‘contesse Yolent’ de *Guillaume de Palerne* », dans : *Études de langue et de littérature du Moyen Âge offerts à Félix Lecoy par ses collègues, ses élèves et ses amis*, Paris, Champion, 1973, p. 115-123.

23） サラ・シュトルム＝マドックスもこのミシャ説に同調し、『ギヨーム』は『フロリヤン』よりも半世紀前に書かれたと推測している（S. Strum-Maddox, “The Arthurian Romance in Sicily : *Floriant et Florete*”, *Conjointure arthurienne*, éd. par J. Dor, Louvain-la-Neuve, Université Catholique de Louvain, 2000, pp. 95-107, especially, p. 96）。

24） *Guillaume de Palerne*, texte présenté et traduit par C. Ferlampin-Acher, Paris, Classiques Garnier, 2012, p. 32-48.

ス）をアレクサンドル・ミシャはクレメンス 3 世（在位 1187 ～ 1191 年）だと推測している。確かにその直前にはグレゴリウス 8 世（在位 1187 年）が 1 年だけ教皇を務めたが、クレメンス 3 世からグレゴリウス 9 世（在位 1227~1241 年）の間には 3 人の教皇が挟まれている。したがって、「2 人のグレゴワールの間」という時間の幅を大きく取る必要がある。

これに対してフェルランパン＝アシェは、物語中の教皇クレマンがむしろクレメンス 4 世（在位 1265 ～ 1288 年）を指す可能性について言及している。このケースでは、クレメンス 4 世がグレゴリウス 9 世とグレゴリウス 10 世（在位 1271 ～ 1276 年）に挟まれている。クレメンス 3 世とクレメンス 4 世はいずれもシチリア問題に腐心したが、特に注目すべき史実はフランス・カペー家のシャルル・ダンジュー（1227 ～ 1285 年）がホーエンシュタウフェン朝のマンフレーディ（マンフレート）を破った「ベネヴェントの戦い」（1266 年）であり、クレメンス 4 世はシチリア王となったシャルルを支持した。この重要な戦いの舞台となった南イタリアのベネヴェントが、『ギヨーム』の中盤に恋人たちの逃亡先として出てくる。これは作品が「ベネヴェントの戦い」以降に書かれ、この史実の記憶を留めているためなのかもしれない[25)]。以上の点からフェルランパン＝アシェは、『ギヨーム』の成立時期を 1280 年頃と考えるべきではないかとしている。

3. 『ギヨーム・ド・パレルヌ』の筋書き

『ギヨーム』は、1 行が 8 音節詩句で書かれた韻文物語であり、9667 行からなっている。中世フランス語で書かれた物語では、『ギヨーム』のようなシチリアとイタリア半島南部を主要な舞台とした作品は珍しい[26)]。さ

25） *Ibid.*, p. 184, note 4.

26） 中世フランス文学に出てくるシチリアとイタリア半島南部を主な舞台とした

らに『ギヨーム』の主人公はイタリア南部のプーリア（シチリア王国の一部）の王になるため、主人公がシチリア王となる『フロリヤン』の比較は重要になってくる。主人公の名ギヨーム（Guillaume、英語名ウィリアム William、イタリア語名グリエルモ Gugliermo）はノルマン人の名前であり、1066 年にイングランドを征服したノルマンディー公ギヨーム 2 世の名や、「善王」と呼ばれたシチリア王グリエルモ 2 世の名[27)]を彷彿とさせる。また『ギヨーム』にも、『フロリヤン』と同じく、ローマ皇帝とギリシア皇帝（コンスタンティノープル皇帝）が登場する。

『ギヨーム』のプロローグで語り手は、自分の知っていることを包み隠さず伝える必要があると述べ、いにしえの話を語ることにする（v. 1–21）。

イタリア南部のプーリアを支配していたのは、アンブロン王だった。王妃はギリシア皇帝の娘フェリーズで、2 人にはギヨームという名の息子がいた。ギヨームの養育を託された 2 人の貴婦人は、アンブロン王の兄弟から、王とギヨームの殺害を命じられていた（v. 22–60）。

王と王妃は 1 ヶ月パレルモに滞在した。ある日、果樹園で盛大な祭りが開催されたとき、1 匹の大きな狼が王の眼前でギヨームを連れ去る。ギヨームを連れた狼は追っ手を振り払い、メッシーナ海峡を渡ってローマ近

最初期の物語には、12 世紀後半のアングロ・ノルマンの詩人ユー・ド・ロトランドが著した『イポメドン』（12 世紀末）と『プロテシラウス』（1191 年以前）がある。なお中世ヨーロッパの地理については、ポール・ズムトール（鎌田博夫訳）『世界の尺度　中世における空間の表象』（法政大学出版局、2006 年）を参照。

27）　善王グリエルモの名は、ダンテの『神曲』の「天国篇」第 20 歌に出てくる。そこでは、鷲が自分の眼の部分に位置している最高位の光明について説明し、栄光に輝く賢王の魂に触れる件で、ダビデ、トラヤヌス、ヒゼキヤ、コンスタンティヌス、トロイア人リベウスと並び、グリエルモ（2 世）の名が挙げられている（ダンテ『神曲　新装版』平川祐弘訳、河出書房新社、1992 年、320–321 頁）。

郊の森にたどり着き、そこで少年を育て始める（v. 61-186）。

狼が獲物探しに出かけていたとき、牛飼いが森の中で少年を見つけて、妻のもとへ連れていく。牛飼い夫婦はギヨームと名乗ったこの少年を一緒に育てることにする。少年が姿を消したことに気づいた狼は、少年の足取りをたどり、牛飼い夫婦の家にたどり着く。そしてこの夫婦が少年を世話し始めたことを知って喜び、その場を後にする（v. 187-269）。

ここで語り手が介入し、狼はスペイン王の息子で、王の後妻ブランドの魔法によって狼に変えられたことを明かす。ブランドは自分の息子ブランダンが次の王になることを望んでいた（v. 270-340）。

7年後、森の中で狩りをしていたローマ皇帝ナタナエルは道に迷い、養父の牛の群れの番をしていたギヨームに出会う。皇帝はギヨームの美貌と立派な振舞いに感心し、宮廷へ連れ帰る。そして、ギヨームの世話を年齢の近い娘メリヨール[28)]に託す（v. 341-737）。

ギヨームは、3年間で生まれのよい若者が学ぶべきことをすべて習得し、皆から称えられた。ギヨームに恋をしたメリヨールは、長い独白の中で、自分よりも身分が低そうな若者に惹かれる未知の感情について自問する。その後、従姉妹にあたるアレクサンドリーヌ（ロンバルディー伯の娘）が、メリヨールに助力を約束する（v. 738-1117）。

ある日の晩、ギヨームは夢でメリヨールを抱きしめるが、目覚めるとそれが夢にすぎないと分かり、彼女が高嶺の花だと悟る。それでも恋心を抑

28） ローマ皇帝の娘メリヨールの名は、12世紀末（1188年以前）に書かれた『パルトノプー・ド・プロワ』で、主人公パルトノプー（フランス王クローヴィスの甥）が冒険の果てに妻に迎えるコンスタンティノープルの姫君の名と同じである。メリヨール（Melior）という名は、ラテン語「ボヌス bonus」（「よい」）の比較級「メリオル melior」（「よりよい」）と響きあっており、ヒロインの素晴らしさを示唆している（*Guillaume de Palerne*, texte présenté et traduit par C. Ferlampin-Acher, *op. cit.*, p. 129, note 1）。

えられないギヨームは果樹園へ行き、メリヨールの部屋の窓の下で嘆く。こうしてギヨームは、恋煩いのために日増しに弱り果てていく。一方、メリヨールは、しばらく前から姿を見せないギヨームのことを心配する。そこでアレクサンドリーヌがメリヨールに、気晴らしのため果樹園へ行くよう勧める。2 人が果樹園に行くと、ギヨームは眠りこんで、メリヨールとアレクサンドリーヌがバラの花を持ってくる夢を見ていた。ギヨームが目を覚ましたとき、彼の前に 2 人がいた。ギヨームはアレクサンドリーヌを介してメリヨールと語り始め、相思相愛であることが分かる（v. 1118–1760）。

2 人が誠実に愛しあうようになった頃、ザクセン公が主君にあたるローマ皇帝に反旗を翻す。皇帝はギヨームと 80 人の若者を騎士に叙任する。こうして始まった戦争は、熾烈を極めた。戦況が皇帝側に不利になると、ギヨームは獅子奮迅の働きを見せ、ザクセン公の甥テッリを殺める。悲しみに暮れるザクセン公が反撃に出たため、ギヨームは捕らわれの身となるが、やがて仲間に助け出され、逆にザクセン公を捕まえる。こうしてローマ皇帝側が勝利し、捕囚の身となったザクセン公は怪我が悪化して亡くなる（v. 1761–2446）。

ローマ軍凱旋の報に接したメリヨールは歓喜し、ギヨームが戻ると 2 人は幸せな生活を送る。ところがギリシア皇帝の使者がローマへやってきて、皇帝が皇子とメリヨールの結婚を望んでいるという伝言をもたらす。ローマ皇帝がその提案を受け入れ、皆が喜びに包まれる中、知らせを聞いたギヨームは悲嘆に暮れて衰弱していく。それでもメリヨールに慰められ、ギヨームは再び愛を確信して回復する。一方、ギリシア皇帝と皇子は結婚式のためにローマへ向かう（v. 2447–2947）。

愛しあうギヨームとメリヨールはローマからの逃亡を決意し、アレクサンドリーヌの助言に従って、城の調理場から奪ってきた白い熊の毛皮をま

とって宮廷を離れる[29]。アレクサンドリーヌが同行を申し出たが、2人はそれを望まなかった。逃亡中の2人は、森の果物で飢えをしのぐ。神に助けを求めると、かつてギヨームを救い出した人狼が2人の後を追ってきて、農夫から奪ったパンや焼き肉と、学僧から奪ったワインの樽を届けてくれる[30]。ギヨームとメリヨールは、人狼から食糧を届けてもらいながら森の中を進み、その地を離れる（v. 2948-3411）。

ギリシア皇帝一行がローマに到着し、お祭り騒ぎとなる。結婚式の準備はすべて整い、花嫁の到着を待つのみとなった。姿を見せない娘を探しに出かけたローマ皇帝ナタナエルは、娘の部屋にいたアレクサンドリーヌから、相思相愛のギヨームとメリヨールが逃亡したことを知る。激怒したローマ皇帝は、ギリシア皇帝の助言に従い、2人の追跡を命じる。2頭の白い熊の逃亡をギリシア人たちが伝え、熊の毛皮が持ち去られたことを城の料理人たちが追認したため、2人の失踪が明らかになる。やがて2人の皇帝は追跡を断念する[31]（v. 3412-3868）。

29） パストゥローが詳述しているように、中世ヨーロッパの熊には、豊かな象徴的意味があった（ミシェル・パストゥロー（平野隆文訳）『熊の歴史―〈百獣の王〉にみる西洋精神史』筑摩書房、2014年）。雄熊が若い娘や女性と好んで交合すると考えられていたことから、ギヨームとメリヨールの熊への変装には性的な含意があるのかもしれない。一方で熊が王家の象徴だったことから、主人公が最終的に王位に就くことを予告している可能性もある。こうした見方に対し、『ギヨーム』をさまざまなジャンルのパロディーとみなすフェルランパン＝アシェは、主人公たちの熊への変装にカーニバル的な側面があると推察している（*Ibid.*, p. 170, note 2）。

30） 人狼がワインの樽を届けたとき、ギヨームは感謝の気持ちを口にする。またメリヨールは、彼女の父（ローマ皇帝）とギリシア皇帝と皇子が自分たち2人と折りあい、結婚話を延期できていた場合と同じほど安堵したと述べる。それまで出ていなかったギリシア皇子の名ラエルトゥニデュス Laertenidus（「ラエルトゥの子孫」）（v. 3362）が、この箇所で唐突に出てくる。この名に含まれる「ラエルトゥ Laerte」は、ホメロス作『オデュッセイア』の主人公オデュッセウスの父ラーエルテースのフランス語名である（*Ibid.*, p. 175, note 2）。

31） 逃亡する2人の追跡を断念するこの箇所（v. 3865）に、ギリシア皇帝の名

人狼に助けられてプーリアへ到着したギヨームとメリヨールは、ある日ベネヴェントの近くにやってくる。長旅で疲れた2人は採石場の洞穴の1つで眠り、仕事にきた工夫たちに発見される。通報を受けた町の代官が12歳の息子を連れて現場に向かうが、人狼が代官の息子をさらい、2人はその隙に森の中へ逃げこむ。その後、2人は熊の毛皮を捨て、人狼が運んできてくれた雄鹿と雌鹿の皮をまとうことにする（v. 3869-4406）。

2人が鹿に変装してプーリアへ入ると、そこはスペイン王のせいで荒廃していた。アンブロン王は亡くなり、プーリア王妃フェリーズに残されたのは娘フロランスだけだった。スペイン王は息子ブランダンとフロランスの結婚を望んでいたが、承諾を得られなかった。そのためプーリア全域がスペイン王軍の攻撃を受け、パレルモの町は陥落寸前だった（v. 4407-4539）。

ギヨームとメリヨールは、人狼に導かれてメッシーナ海峡を渡る。その後パレルモに到着すると、城壁の下を通り、塔の下の果樹園で休憩した。ちょうどそのときプーリア王妃は、1匹の狼と（近づくと鹿に見える）2頭の熊が助けにくる幻夢を見た。自分の両腕が伸び、右手がローマ、左手がスペインに置かれたときに目を覚ました王妃は部屋の窓から、果樹園に獣の皮をかぶった若者たちがいるのを見かける。王妃は宮廷つき司祭モワザン[32)]の忠告に従って、自らも獣の毛皮に身を包み、果樹園へ出かける。そして2人に自分の素性と苦境を伝えると、ギヨームが王妃に助力を約束する（v. 4540-5302）。

パトリシデュス Patrichidus が初めて出てくるが、物語中でこの固有名はここにしか現れない。次行（v. 3866）の plus と脚韻を作るためだけに、この名が使われた可能性もある（*Ibid.*, p. 184, note 1）。

32） 宮廷つき司祭の名モワザン（Moysan）は、旧約聖書に出てくる古代イスラエル民族の指導者モーセのフランス語名モイーズ（Moïse）に連なる名前であり、古代の知恵を含意している（*Ibid.*, p. 199, note 2）。

ギヨームとメリヨールは王妃とともに城に行き、鹿の皮を外してもらって入浴し、身なりを整えて広間に戻る。プーリア王妃フェリーズから亡き夫の駿馬[33]を授けられたギヨームは、難なくこれを乗りこなす。ギヨームはスペイン軍との激戦を制し、スペイン王と王子を捕らえる。スペイン王は和平を願い出て認められるが、この間、王妃は相変わらず、命の恩人が自分の息子であることに気がつかなかった。かつて人狼に連れ去られた4歳にも満たなかった息子は、すでに溺死したと考えていたからである。そこへ人狼が姿を見せ、王妃とギヨームに挨拶し、皆が驚く（v. 5303-7106）。

スペイン王がフェリーズに恭順の意を表すと、人狼は自分の父に他ならないスペイン王の足もとに駆け寄り涙を流す。するとスペイン王は、先妻との間にもうけた息子アルフォンスへ後妻ブランドがかけた魔法のことを思い出す。命の恩人である人狼に感謝するギヨームは、人狼がもとの姿に戻れるよう、スペイン王にすぐさま王妃を呼び寄せるよう命じる。スペイン王妃ブランドはパレルモへ到着すると変身の解除を行い、アルフォンスはもとの姿に戻る。アルフォンスは義母を許し、自分の素性とこれまでの経緯をギヨームに語る（v. 7107-8249）。

プーリア王となったギヨームから知らせを受けたローマ皇帝ナタナエルは、娘メリヨールとギヨームの結婚式に参列するため、アレクサンドリーヌとともにパレルモにやってくる[34]。スペイン王から攻撃を受けたとき、

33） 亡きアンブロン王の駿馬の名ブランソードブリュエル（Brunsaudebruel）は、「ブラン」と「ソードブリュエル」の組み合わせであり、このうち「褐色」を指す「ブラン brun」は馬の毛並みを、「藪（ブリュエル bruel）を飛び越える（ソートゥ saute）」と解釈できる「ソードブリュエル saudebruel」は馬の敏捷さを表している（*Ibid.*, p. 209, note 1）。

34） メリヨールがアレクサンドリーヌに語った冒険譚を、部屋にいた諸侯やスペイン王やローマ皇帝は注意深く聞いた。その件で、語り手はローマ皇帝を「ドイツ皇帝」（v. 8672）と呼んでいる。このことはホーエンシュタウフェン朝の

フェリーズは父のギリシア皇帝に救援を求めたが、皇子（フェリーズの兄弟）の率いる援軍が到着したのは、まさしくこの時期だった。こうしてギヨームはメリヨールと、アルフォンスはギヨームの妹フロランスと、ブランダンはアレクサンドリーヌと結婚し、ギリシア皇帝の息子だけが未婚のまま自国へ戻る。ナタナエルの死後、ギヨームはローマ皇帝となり、アルフォンスは父の後を継いでスペイン王になる。プーリア王妃フェリーズはかつて自分の右手がローマ、左手がスペインに置かれる夢を見たが、息子ギヨームがローマ皇帝になり、娘フロランスがスペイン王妃となることで正夢となったのである（v. 8250-9665）。

4.『フロリヤンとフロレット』と『ギヨーム・ド・パレルヌ』の比較

『フロリヤン』と『ギヨーム』の比較にあたり、悩ましい問題は2作品の創作年代である。『フロリヤン』については別稿[35]で整理した通り、推定創作年代は12世紀末、13世紀、14世紀と研究者によって異なり、20世紀末の時点ではアレクサンドル・ミシャによる「1250年から1275年の間」という説が大方の賛同を得ていた。しかし近年では、『フロリヤン』と密接な関係にある長編物語『クラリスとラリス』の冒頭に記されているアンティオキア公国の滅亡という史実を根拠に、『フロリヤン』の創作年代の下限は1268年以降だと推測されている。

これに対して『ギヨーム』の創作年代については、先述した通り、現時点でアレクサンドル＝ミシャによる1220年代説とクリスティーヌ・フェルランパン＝アシェによる1280年代説が並立している。そのため、『フロリヤン』と『ギヨーム』のどちらが先行作品であるかを特定し、相互の

神聖ローマ皇帝たちの威光を喚起しているのかもしれない（*Ibid.*, p. 260, note 1）。

35）前掲・拙稿「『フロリヤンとフロレット』における妖精モルガーヌ」。

影響関係を想定しながら議論することはできない。したがって以下の分析では、この2作品に共通する筋書き・テーマ・モチーフを抽出し、13世紀のフランス語圏にシチリア王子を主人公とする物語伝承が存在したことを明らかにしたい。

『フロリヤン』研究史において、『ギヨーム』との比較研究を行った研究者は少ない。1926年にアイリーン・ペティット・マッキーハンが発表した「『ギヨーム・ド・パレルヌ』—中世の〈ベストセラー〉」(『米国現代語学文学協会紀要』)[36]がおそらく『フロリヤン』と『ギヨーム』の類似を指摘した最初期の論考であり、今もその価値を失ってはいない。以下ではマッキーハンの論考を導きの糸とし、適宜補足や修正を行いながら、分析を進めていきたい。

マッキーハンは『ギヨーム』の分析にあたり、この物語が「親もとから姿を消した王子が皇帝の娘に恋をし、母を敵から救い出し、最終的に己の権利を回復する」物語が「核」となり、雌狼が養育したローマの建国者「ロムルスとレムス」型の古い民話や、『メリヨンの短詩』に代表されるケルト系の人狼譚、さらには同時代の読者=聴衆の関心を惹いた諸要素を組み合わせて成立したと推測している。そのうえでマッキーハンは、『フロリヤン』と『ギヨーム』の共通点として、以下の11の点を挙げている(ここではマッキーハンの記述に大幅な補足を行った)。

(1) 主人公はシチリア王またはプーリア王の息子である(『フロリヤン』の主人公の父はシチリア王エリヤデュス、『ギヨーム』の主人公の父はプーリア王アンブロンである)。

(2) 物語の冒頭、邪悪な存在が主人公の父や主人公に対して陰謀をたく

36) I. P. McKeehan, "*Guillaume de Palerne* : A Medieval *Best Seller*", article cité.

らむ（『フロリヤン』では、シチリア王の家令マラゴが、愛する王妃を手に入れようとして、森での雄鹿狩りの折に王を殺害し、王位を簒奪する。『ギヨーム』では、プーリア王の兄弟がギヨームの養育係の女性２人を買収し、ギヨームとその父王を亡き者にしようとする）。

(3) 命を狙われていた主人公が、何者かによって連れ去られ、きちんと育てられる（『フロリヤン』では、シチリア王の暗殺後、妊娠中だった王妃が忠臣オメールの居城モンレアルに向かう途中、森の中で息子を出産する。しかし息子は妖精モルガーヌによってモンジベルへ連れ去られる。フロリヤンと名づけられた息子は、己の出自を知らぬまま立派に育てられる。『ギヨーム』では、プーリア王が果樹園で盛大な祭りを開いていた際に、人狼が４歳のギヨームを連れ去る。人狼はプーリア王の兄弟の陰謀を知り、ギヨームを救い出して森の中で育てた）。

(4) 主人公の母は、息子がすでに亡くなったと考え、望まぬ結婚を回避しようとする（『フロリヤン』では、王位を簒奪した家令マラゴがシチリア王妃との結婚を望み、モンレアルに籠城した王妃を兵糧攻めにする。『ギヨーム』では、プーリア王妃フェリーズにフロランスという名の娘がおり、スペイン王が息子ブランダンとフロランスの結婚を望む。しかしこの縁談を拒まれたスペイン王はプーリア全域を荒廃させ、プーリア王妃と娘の残るパレルモが陥落寸前となる[37]）。

(5) 主人公は、苦境に立たされていた母の救出に向かう（『フロリヤン』では、妖精モルガーヌがアーサー王の宮廷にいたフロリヤンに手紙を送り、モンレアルでマラゴに攻囲されている母の救出へ向かうよう求める。『ギヨーム』では、ギヨームは人狼に導かれ、スペイン王の軍から攻撃を

37）『フロリヤン』のシチリア王妃が、シチリア王を暗殺した家令マラゴとの再婚を拒むのは当然のことであるが、『ギヨーム』のスペイン王子ブランダンがフロランスに相応しい結婚相手ではない理由は記されていない。

受けていた母のいるパレルモに到着する)。

(6) 主人公は一騎討ちで、王の家令を破る(『フロリヤン』では、主人公がマラゴとの一騎討ちに挑み、敗北したマラゴは主君への裏切りを告白し、馬による八つ裂き刑となる。『ギヨーム』では、パレルモから300人の騎士を連れて出陣したギヨームがスペイン王の家令を倒したのを機に、激戦が始まる[38])。

(7) 長い冒険の果てに、主人公の出自が明らかになる(『フロリヤン』では、主人公の育ての親である妖精モルガーヌが、フロリヤンに送り届けた手紙の中で彼の出自を明かす。『ギヨーム』では、義母によって変身を解除されたスペイン王子アルフォンスが、人狼だった頃の苦労話と、スペイン軍を撃破したギヨームの活躍を語ることにより、ギヨームとその母と妹は互いの身もとを確かめる)。

(8) 主人公が皇帝の娘に恋をする(『フロリヤン』では、シチリア王子フロリヤンがギリシア皇帝フィリメニスの娘フロレットと相思相愛になる。しかしギリシア皇帝がシチリア王妃を攻囲したマラゴに加勢していたため、フロリヤンにとってフロレットは敵軍の首領の娘にあたる存在だった。『ギヨーム』では、ローマ皇帝ナタナエルによって森から連れてこられたギヨームが、皇女メリヨールと相思相愛になる)。

(9) 主人公は皇女の腹心の友の仲介により、皇女の恋心を確かめる(『フロリヤン』では、恋に悩むフロレットが友人ブランシャンディーヌ(ハンガリー王女)の助言により、使者をフロリヤンのもとに送って相手の気持ちを確かめる。『ギヨーム』では、メリヨールが従姉妹にあたるアレクサ

---

38) 『フロリヤン』では、アーサー王の軍とギリシア皇帝軍の戦いを終わらせるため、フロリヤンが神明裁判の形でマラゴとの決闘を提案している。これに対して『ギヨーム』では、ギヨームがスペイン王の家令を倒したのは、戦闘の成り行きによるものである。

ンドリーヌ（ロンバルディー伯の娘）の助言で果樹園へ気晴らしに行き、ギヨームに会ってお互いの恋心を確認する）。

（10）主人公は自分の父の後継者となり、妻の父である皇帝の死後に皇位を受け継ぐ（『フロリヤン』では、アーサー王の軍との戦いを和平によって終えたギリシア皇帝が、パレルモの人々を集め、フロリヤンを新王に迎えるよう提案して賛同を得る。その後、ギリシア皇帝が亡くなると、フロリヤンはコンスタンティノープルで戴冠式を挙げる。『ギヨーム』では、ローマ皇帝が娘メリヨールをギリシア皇帝の息子に嫁がせることに同意していたが、相思相愛のギヨームとメリヨールはローマから逃亡する。人狼の案内でパレルモに到着したギヨームは、スペイン王の軍の攻撃から母と妹を救出すると、ローマ皇帝に使者を送り、自分たちの結婚式に参列してもらう。プーリア王となったギヨームは、ローマ皇帝の死後、そのまま皇位を継承する）。

（11）主人公とその恋人が、身もとを隠して旅をする（『フロリヤン』では、結婚したフロリヤンとフロレットは、シチリアに3年留まった後、2人でブルターニュへ冒険の旅に出る[39]。その際、人々に気づかれぬよう、それぞれ「美貌の野人」と「島の陽気姫」という異名[40]を用いる。『ギ

39）中世フランス文学には、双子を思わせるような若い男女の主人公の名前を題名に組み合わせた「牧歌的物語」（roman idyllique）と呼ばれるジャンルがある。「牧歌的物語」はクレティアン・ド・トロワの現存第1作『エレックとエニッド』にその萌芽が認められ、『フロワールとブランシュフルール』、『アマダスとイドワーヌ』、『オーカッサンとニコレット』とともに、『フロリヤンとフロレット』をこのジャンルに含める研究者もいる。「牧歌的物語」ではヒロインが受動的な役割を演じるのが常であるため、妻が積極的に夫の冒険旅行へ同行し、ドラゴン退治まで行うフロレットのケースは例外的である（Y. Foehr-Janssens, « La fiancée perdue et retrouvée dans les romans idylliques（XIIe-XVe siècles）», *Clio. Femmes, Genre, Histoire*, 30, 2009, p. 61-78）。

40）フロリヤンは15歳のとき妖精モルガーヌから騎士に叙任されると、魔法の舟でアーサー王宮廷に向けて出立しさまざまな試練を経るが、その過程で「舟

ヨーム』では、ギヨームとメリヨールは結婚前に行った長い逃亡生活の中で、熊や鹿の毛皮を用いて変装していた)。

このように『フロリヤン』と『ギヨーム』には、物語の冒頭から大団円に至るまで、数多くの共通点が見つかる。「王子が親もとから引き離され、己の出自を知らぬまま幼少年期を過ごし、父の死後に苦境に立たされた母を救出し、皇女を妻に迎える」という大枠が同じである。また、いずれの作品もシチリアとイタリア半島南部を主要な舞台としていて、ギリシア皇帝とローマ皇帝が筋書きに関与している。

物語の構造において特に重要な役割をしているのは、冒頭で主人公を誘拐し、後に主人公にとって最大の援助者となる存在である。この存在に相当するのが、『フロリヤン』では妖精モルガーヌ、『ギヨーム』では人狼アルフォンスである。「人狼」のモチーフは、『フロリヤン』にはなく、『ギヨーム』だけに見つかる。このモチーフはケルト文化圏の民間伝承に由来し、マリー・ド・フランス作『ビスクラヴレットの短詩』[41)]や作者不詳『メリヨンの短詩』[42)]、さらには中世ラテン語の散文作品『アーサー王とゴ

を率いる騎士」(Chevalier qui la nef maine)という異名を名乗り、倒した敵や助け出した人々をアーサー王宮廷に送り届けている。こうした異名は、物語の主人公が予備試練の最中にあることを表している。「伝記物語」の系譜に属する『双剣の騎士』(1235 年頃)に登場する、自分の名を知らなかった主人公メリヤドゥックは、クウに「双剣の騎士」と呼ばれ、自らもそう名乗っている。

41) 『ビスクラヴレットの短詩』については、フィリップ・ヴァルテール編著・プレイヤッド版『中世の短詩—マリー・ド・フランスとその他の作者たちの物語(12 ～ 13 世紀)』(*Lais du Moyen Âge. Récits de Marie de France et d'autres auteurs (XIIe-XIIIe siècles),* édition sous la direction de Ph. Walter, Paris, Gallimard, 2018)収録のテクスト(p. 92-107)と注釈(p. 1137-1142)を参照。なお『ビスクラヴレットの短詩』における狼への変身については、フィリップ・ヴァルテール(渡邉浩司・渡邉裕美子訳)『ユーラシアの女性神話—ユーラシア神話試論Ⅱ』(中央大学出版部、2021 年)第 2 章中、44-48 頁を参照。

42) 『メリヨンの短詩』については、前掲書・ヴァルテール編著・プレイヤッド

ルラゴン王』[43]に先行例が出てくる。

『ギヨーム』では、義母の魔法で狼の姿に変えられたスペイン王子アルフォンスが、試練の果てに人間の姿を取り戻し、スペイン王として即位するという筋書きに「人狼」のモチーフが使われている。この筋書きと並行する本筋で、人狼アルフォンスに連れ去られたプーリア王子ギヨームは、己の出自を知らぬままローマ皇帝の宮廷で頭角を現し、皇女と相思相愛になり、獣の毛皮に身を包んで皇女とともに逃避行を続けた後、プーリア王、さらにはローマ皇帝となる。

このように『ギヨーム』では、獣への変身と変装のモチーフが、スペイン王子とプーリア王子の経験する一連の試練と密接に結びついている。つまり「人狼」のモチーフが、一時的に失われた社会的身分を 2 人の王子が回復する、通過儀礼としての物語の中核となっている。この「人狼」のモチーフの有無こそが 2 編の類似した物語『ギヨーム』と『フロリヤン』を分かつ鍵であり、作品の基調の違いを生み出している。

5. クレティアン・ド・トロワ『クリジェス』との比較

現時点で創作年代が確定できないため、『フロリヤン』と『ギヨーム』について相互の影響関係を想定しながら議論することはできない。しかしながら、シチリアとイタリア半島南部を主な舞台としたこの 2 作品は、先行作品の 1 つにあたるクレティアン・ド・トロワの現存第 2 作『クリ

版『中世の短詩』（*Lais du Moyen Âge*）収録のテクスト（p. 867–895）と注釈（p. 1330–1337）を参照。

43）『アーサー王とゴルラゴン王』については、フィリップ・ヴァルテール編著『アーサー・ゴーヴァン・メリヤドック— 13 世紀のラテン語によるアーサー王物語』（*Arthur, Gauvain et Mériadoc. Récits arthuriens latins du XIIIe siècle*, édition sous la direction de Ph. Walter, Grenoble, Ellug, 2007）収録のラテン語原文と現代フランス語訳（p. 23–61）を参照。

ジェス』（1176 年頃）を主な着想源とした可能性が極めて高い。ここでは、『フロリヤン』および『ギヨーム』が『クリジェス』から着想を得たと思われる諸要素を拾い上げておきたい。

『クリジェス』の構成は、主人公の話の前にその両親の話を語るという 2 世代並置となっている[44)]。物語前半では、コンスタンティノープル皇帝アレクサンドルとソルダモールの牧歌的な恋愛が語られており、クリジェスはこの夫婦の一粒種である。物語後半では、アレクサンドルの死後に王位に就いた弟アリス、その妻フェニス、クリジェスの三角関係が語られている。「トリスタン物語」と筋立てが似ているのは意図的であり、恋人たちが死においてしか結ばれることのない「トリスタン物語」の悲恋とは異なり、『クリジェス』ではハッピーエンドが用意されている。

1）『クリジェス』と『フロリヤンとフロレット』

『クリジェス』の特徴的な要素は、「武勲詩」を思わせる戦闘の場面と、主人公たちが恋愛感情を吐露する独白（モノローグ）の多用である。『フロリヤン』では、シチリア王妃（主人公フロリヤンの母）の解放を目論むアーサー王の軍とコンスタンティノープル皇帝フィリメニスの軍との激戦、さらにその過程で偶然出会うフロリヤンと皇女フロレットが恋愛感情を独白で吐露する場面が、『クリジェス』と重なっている。

「アーサー王物語」という枠内で 2 作品を検討してみると、アーサー王の甥ゴーヴァンの位置づけが興味深い。『クリジェス』の物語前半でアレクサンドルの妻となるソルダモールは、ゴーヴァンの妹にあたる。これに対して『フロリヤン』のゴーヴァンはフロリヤンの戦友であり、フロリヤ

44）拙著『クレチアン・ド・トロワ研究序説―修辞学的研究から神話学的研究へ』（中央大学出版部、2002 年）第Ⅱ部・第 2 章「『クリジェス』に見る「構造のイロニー」―2 世代並置による 2 部構成の戦略」を参照。

ンとフロレットの結婚の折に、フロレットの友人にあたるハンガリー王女ブランシャンディーヌと結婚して、ハンガリー王となっている。

次に、主人公の戴冠に注目してみよう。『クリジェス』の大団円で、クリジェスはアリスの憤死によりコンスタンティノープルで戴冠式を挙げ、結果的に父アレクサンドルの皇位を受け継いでいる。しかし『フロリヤン』の主人公は、亡き父エリヤデュスが支配していたシチリアを受け継ぐだけでなく、妻の父フィリメニスの死後にはギリシアの皇位も手にしている。ギリシア皇帝となるフロリヤンの姿は、アリスの死後に戴冠式を挙げるクリジェスの姿を念頭に置いたものだと言えるだろう。

2)『クリジェス』と『ギヨーム・ド・パレルヌ』

『クリジェス』前半のアレクサンドルとソルダモール、『クリジェス』後半のクリジェスとフェニス、『フロリヤン』のフロリヤンとフロレットは、それぞれ恋の苦しみを「独白」の形で表すが、一方で男性の主人公たちは戦場で目覚ましい働きを見せている。『ギヨーム』でも、ローマ皇帝の娘メリヨールが自分より身分が低いと思われたギヨームへの恋に苦しみ、己の出自を知らないギヨームがメリヨールに恋をして衰弱するが、それとは対照的に、ローマ皇帝に反旗を翻したザクセン公の軍との戦いでは、ギヨームが目覚ましい武勲を見せる。

主人公の婚姻関係に着目すると、『ギヨーム』は『フロリヤン』以上に『クリジェス』から多くの要素を借り受けていることが分かる。『クリジェス』後半の主人公クリジェスは叔父アリス（コンスタンティノープル皇帝）とその妻フェニスをめぐって三角関係となるが、『ギヨーム』でも主人公ギヨームが結果的にローマ皇女メリヨールを、自分の叔父（または伯父）にあたるギリシア皇子と奪い合っている。ギリシア皇帝がローマ皇帝に伝令を送ってギリシア皇子とメリヨールの縁談をまとめたため、愛しあ

うギヨームとメリヨールは逃避行に出たのだった。

『クリジェス』のフェニスはアリスとの結婚後、後述するように「偽りの死者」を演じ、クリジェスとともに逃亡生活を送る。最後には事の真相を知ったアリスが憤死し、クリジェスとフェニスはコンスタンティノープルへ帰還して戴冠式を挙行する。これに対し『ギヨーム』のギリシア皇帝とローマ皇帝は、ギヨームとメリヨールの追跡を断念する。ギリシア皇子は、スペイン軍から攻撃を受けていた姉妹フェリーズを助けようと遅れて駆けつけるが、そこでギヨームとメリヨールの結婚を初めて知り、自分の甥（ギヨーム）が婚約者（メリヨール）を奪ったことに思い至る。

『クリジェス』と『ギヨーム』の共通点はこれだけに留まらない。なかでも注目すべきは、ヒロインに献身的に仕える侍女的な存在である。『クリジェス』では、フェニスが夫アリスのもとを離れられるよう、服用すると死者のようになる魔法の水薬を侍女のテッサラ[45]が用意する。フェニスはこの水薬を飲み、表向きには死者として墓に埋葬される。その後クリジェスが「偽りの死者」フェニスを墓から助け出し、2人は隠れ家で暮らすようになる（その名が不死鳥（フェニックス）を喚起するフェニスは、こうして蘇る）。テッサラはフェニスがアリスと結婚したときにも別の秘薬を用意し、それを口にしたアリスは初夜で、妻を抱いているつもりで実際は幻覚に翻弄される。

『クリジェス』の侍女テッサラに対応するのが、『ギヨーム』のアレクサンドリーヌである。ギリシア皇子との婚姻を避けるためにメリヨールがギヨームと逃避行に出るにあたり、アレクサンドリーヌは侍女役の友人として献身的に振舞う。メリヨールからギヨームゆえに味わっている恋煩いを初めて打ち明けられたとき、アレクサンドリーヌは恋の苦しみを和らげる

45）テッサラについては、前掲書・ヴァルテール『アーサー王神話大事典』、260頁を参照。

ための薬草（‘Une herbe’, v. 1086）を話題にする。これは『クリジェス』の侍女テッサラがフェニスのために用意する2種類の秘薬を想起させる。

次に注目されるのは、主人公の武勇伝である。『クリジェス』後半で、アリスが妻を娶らないという兄アレクサンドルと交わした約束を破り、すでにザクセン公との婚姻が決まっていたドイツ皇帝の娘フェニスを娶ったために、ギリシア・ドイツ連合軍とサクソン軍の間で戦争が起こる。そこでクリジェスは大活躍を見せ、戦いのさなかに敵軍に誘拐されたフェニスを救い出す。

これに対して『ギヨーム』では、主君にあたるローマ皇帝にザクセン公が反旗を翻し、皇帝軍とサクソン軍の間で戦争が起こる。騎士に叙任されたギヨームは、ザクセン公の甥を殺め、続いてザクセン公も捕らえ、皇帝軍の勝利に貢献する。この戦闘でギヨームはモレル（Morel, v. 2272）という名の馬に乗っていた。この馬の名が、サクソン軍との戦いを終えたクリジェスが海を渡って大ブリテン島のアーサー王のもとへ向かい、オックスフォードで開催された4日間の馬上槍試合で初日に乗った、『クリジェス』に出てくる馬の名と同じであるのは偶然ではない[46)]。

最後に指摘しておきたいのは、コンスタンティノープル皇后の幽閉という慣例への言及である。『クリジェス』ではクリジェスとフェニスの戴冠式で筋書きが終わるが、物語はクリジェス以降の皇帝が皇后に対して抱いた猜疑心で幕を閉じる。

Einz puis n’i ot empereor

46）『クリジェス』の4649行と4653行に、馬の名モレル（Morel）が出てくる。フィリップ・ヴァルテールによると、この名は慣例で黒い毛色の馬につけられていたもので、褐色の肌をしたモール人（Maure）を想起させるという（前掲書・プレイヤッド版『クレティアン・ド・トロワ全集』p. 1160、p. 285への注1）。

N'eüst de sa fame peor
Qu'ele nel deüst decevoir,
Se il oï ramantevoir
Comant Fenice Alis deçut,
Primes par la poison qu'il but,
Et puis par l'autre traïson.
Por ce einsi com an prison
Est gardee an Constantinoble,
Ja n'iert tant haute ne tant noble,
L'empererriz, quex qu'ele soit :
L'empereres point ne s'i croit,
Tant con de celi li remanbre ;
Toz jorz la fet garder en chanbre
Plus por peor que por le hasle,
Ne ja avoec li n'avra masle
Qui ne soit chastrez en anfance.
De ce n'est crienme ne dotance
Qu'Amors les lit an son lïen.
Ce fenist l'uevre Crestïen. v. 6749-6768

それ以降、妻が自分を裏切るのではないかと、妻を恐れない皇帝はいなかった。なぜなら、フェニスがどのようにアリスを欺いたかについて、まず魔法の水薬を飲ませ、次に他の奸計によって欺いたことを聞き知っていたからである。そのため、コンスタンティノープルの皇后は、どんなに気高く、どんなに高貴であろうとも、囚人のように閉じこめられた。皇帝は、フェニスのことを覚えている限り、決して皇后のことを信じられないのである。皇帝は皇后を常に部屋に閉じこめて

おくが、それは日焼け防止のためというより、不信感のためである。子供のときに去勢した者でない限り、男は決して皇后に近づけなかった。そうすれば、愛の神が彼らの縁をつなぎ止めておくのに、過ちも恐れもないからである。ここでクレティアンの作品は終わる。

『ギヨーム』でこの箇所を彷彿とさせるのが、ローマ皇帝ナタナエルに対してアレクサンドリーヌが述べた科白である。ギリシア皇子との結婚式の準備が整う中で娘メリヨールが姿を見せなかったため、ローマ皇帝は娘の部屋に行ったが、娘はすでにギヨームとともに姿を消していた。その場に残っていたアレクサンドリーヌはローマ皇帝の怒りを恐れて申し開きをする場面で、メリヨールがギリシア皇子との結婚を望まぬ理由を次のように述べている。

Ne vousist pas cest mariage,
Car on li a bien dit l'usage
Des signors de Constantinoble.
Ja n'aront feme, tant soit noble,
Si vaillant nule ne prisie,
N'estraite de haute lignie
Qu'ele ne soit lues mise en serre.
Molt puet, ce dist, haïr la terre,
La richoise, la region
De coi on n'a fors que le non.
N'avra fors non d'emperreïs :
Il ne li puet avenir pis.
Ensi vivra, mais comme pors. v. 3591-3603

姫君はこの婚姻を望まなかったことでしょう。なぜなら、コンスタンティノープルの主君たちの慣例が、姫君にきちんと伝えられていたからです。慣例では、どんなに気高く高潔で、敬愛され高貴な生まれであろうとも、女性はすぐに閉じこめられることになっていました。名前しか与えられないような国、土地、地方は大いに憎んでもよいと、姫君は私に言いました。姫君が得るのは皇后の称号だけで、姫君にとってこれほどひどいことは起こりえないでしょう。姫君はそのように、獣[47]のごとく暮らすことになるのですから。

アレクサンドリーヌの科白に出てくるこのコンスタンティノープルの後宮（ハレム）は、まさしく『クリジェス』のエピローグを踏まえたものだと考えられる。

6. おわりに

本稿では、シチリア（またはプーリア）王子を主人公としイタリア半島南部を主な舞台としている点で著しい類似が従来から指摘されてきた、『フロリヤン』と『ギヨーム』の比較を試みた。いずれも 13 世紀に中世フランス語韻文で書かれた作者不詳の物語であるが、現時点では創作年代の確定が困難であるだけでなく、作者も時代背景も判然としていない。

『フロリヤン』についてはかつてガストン・パリスが、ノルマン人によってシチリアに持ちこまれた古いケルト伝説が現地でふさわしい形に作り直された後、それがフランスへ持ち帰られ、名の知れぬ詩人によって地

47）「獣」と訳出した原語 pors（v. 3603）は「豚」を指すが、中世期には「猪」も意味した。したがってこの詩行は、社会の中での孤立や、愛のない生活を表しているのかもしれない（*Guillaume de Palerne*, texte présenté et traduit par C. Ferlampin-Acher, *op. cit.*, p. 179-180, note 2）。

方色がほとんど取り除かれて現存する形になったと推測した[48]。しかし『フロリヤン』がフランスではなくシチリアで執筆されたとすれば、シチリアの支配者が目まぐるしく変わった歴史上のどの時点で創作されたのかを特定するのは困難である。

シチリアは、11 世紀後半にノルマン人に征服され、初代国王ルッジェーロ 2 世（在位 1130 ～ 1154 年）がパレルモの宮殿をノルマン支配の司令塔とした。ルッジェーロ 2 世の死後、「悪王」グリエルモ 1 世と「善王」グリエルモ 2 世の治世が続いたが、1194 年にホーエンシュタウフェン家の神聖ローマ皇帝ハインリヒ 6 世にシチリアの王位を奪われる。こうした史実を重視すれば、サラ・シュトルム・マドックスが推測したように、『フロリヤン』はノルマン人がシチリアを支配した黄金時代を回顧した作品だと考えられる[49]。

ホーエンシュタウフェン家に続き、1266 年にアンジュー家のシャルル 1 世（フランスのルイ 9 世の弟）がシチリア王国を征服したが、1282 年にアンジュー家に対する「シチリアの晩禱」と呼ばれるシチリア人の反乱が起き、シチリア王国はアラゴン家のペドロ 3 世のシチリアとシャルル 1 世のナポリ王国へと分裂した。歴史上のこの時期に注目すれば、若き主人公フロリヤンが家令からシチリア王国を奪還する筋書きは、シチリアを追われてナポリへ渡ったシャルル 1 世とその息子の境遇と重なることが分かる。

これに対して『ギヨーム』は、作品の最後に被献呈者として「伯爵夫人

48） G. Paris, « La Sicile dans la littérature française du Moyen Age », article cité, p. 112.

49） S. Strum-Maddox, « Arthurian Evasions : The End(s) of Fiction in *Floriant et Florete* », *Por le soie amisté. Essays in Honor of Norris J. Lacy*, ed. by K. Busby and C. M. Jones, Amsterdam et Atlanta, Rodopi, 2000, pp. 475-489.

ヨランド」の名が出てくることから、シチリアではなく、現在のフランス北部とベルギー北部を支配していたフランドル伯の周辺で書かれた可能性が高い。しかし先述した通り、このヨランドを「エノー伯ボードゥアン4世の娘」と取るか、「ロベール・ド・ダンピエールの妻」と取るかによって、時代背景も創作年代も大きく変わってしまう。

物語には「伯爵夫人ヨランド」が「この本を記して作らせ、ラテン語からフランス語に翻訳させた」（'Cest livre fist diter et faire / Et de latin en roumans traire.', v. 9659–9660）と記されており、作中には「種本」にあたる「物語」（'estoire' または 'escris'）への言及が7度も出てくる（v. 20, v. 276, v. 280, v. 293, v. 327, v. 8393, v. 9653）。ここに出てくる「ラテン語」の「種本」はおそらく存在せず、中世フランス語の作品によく見られるように、物語の権威づけのために使われていると考えられる[50)]。

このように『フロリヤン』と『ギヨーム』には、創作年代や時代背景など不確定要素がいまだに数多く残されている。しかし本稿で明らかにしたように、この2作品には少なからぬ共通点があるため、13世紀のフランス語圏に「シチリア王子が冒険の果てに、一時的に失われていた己の権利を回復する」という筋書きを持った宮廷風騎士道物語の祖型が存在した可能性は十分にあるだろう。またいずれの物語も、先行作品の1つであるクレティアン・ド・トロワ作『クリジェス』の影響を受けていることは間

50） クレティアン・ド・トロワは『クリジェス』冒頭で、これから語る「物語」（'estoire', v. 18）をボーヴェーの聖ピエール（ペトロ）教会の図書館で見つけたと述べている。またクレティアンの遺作『グラアルの物語』に4度見つかる「物語」（'estoire'）への言及（v. 2809, v. 3262, v. 6217, v. 7681）は、言述の正しさを証明するために使われている。それに対してロベール・ド・ブロワは『ボードゥー』の冒頭で、トゥールの聖マルタン修道院で見つけたラテン語版をフランス語の韻文に移したと述べている。このように作品の典拠とされる種本は見つかっておらず、文学上の慣例として権威づけの働きをしていると考えられる。

違いない。つまりそれぞれの作者が、『クリジェス』の筋書き・テーマ・モチーフを巧みに用いながら、独自の改変を行っていると思われるのである。

謝辞　本研究は JSPS 科研費 JP20K00481 の助成を受けたものである。ここに特記し感謝の意を表したい。